

これみ
週刊「考歴民」No14

2021.6.28 交野古文化同好会

考古・歴史・民俗の頭文字を取って考歴民（これみ）と名付けました。

第十三の宿は甲尾

「鑑」「図絵」には鴻尾山とあり交野尾とも書す。今日の交野山岩倉開元寺址を指すと考えて誤りない。その麓は禁野に続く交野が原の扇状地で古代にはすぐ足下に郡衛と郡寺長宝寺を眺めることができた景勝の地で、山頂にはひときわ大きな巨岩と呼んでいるが、交野が原のどこからでもよく望まれ、この地方の神南備であったと思われる霊所である。



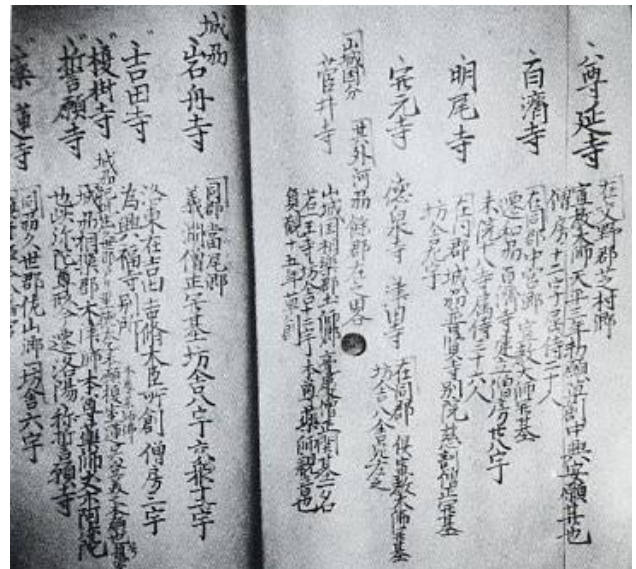
その麓には正面に交野山を拝すような形で機物神社は鎮座し古くから交野の人々に親しまれた聖なる山であった。



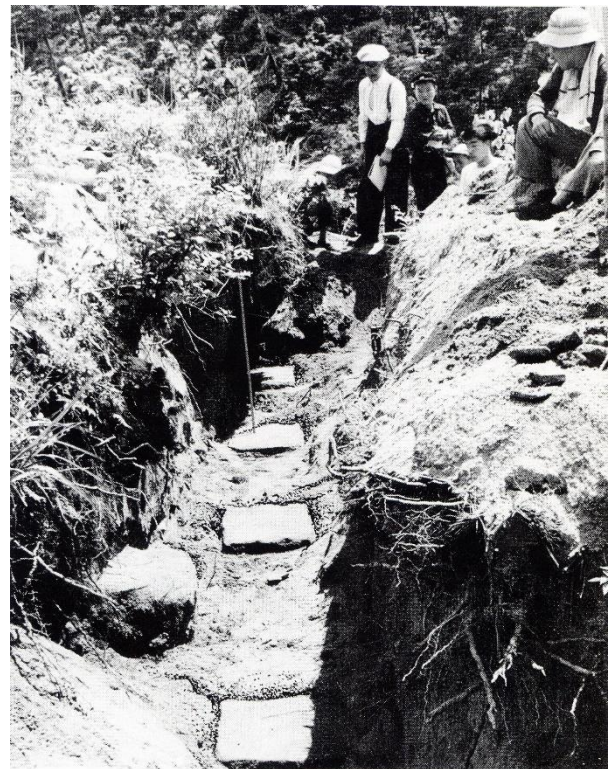
機物神社の鳥居の真ん中に交野山

この山頂に開元寺という寺が作られたのは発掘調査の結果鎌倉時代といわれ、その前身寺院が山麓の神宮寺にあったとされている。

「興福寺官務牒疎」には「開元寺 徳泉寺 津田寺 在同郡（交野）俱宣教大師開基坊舎八舎宛有之」としており、奈良時代興福寺の僧宣教の開基と伝えている。



興福寺官務牒疎（嘉吉元年 1441 年）



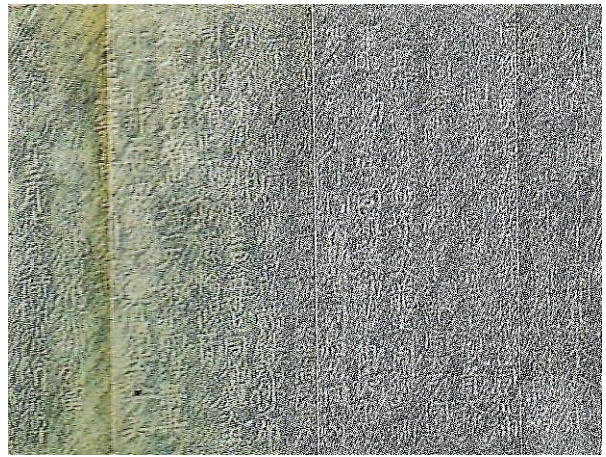
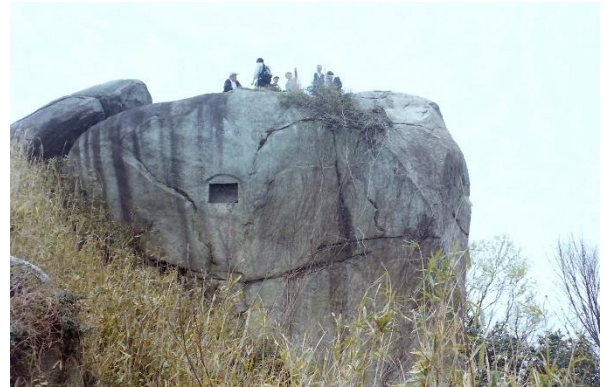
岩倉開元寺址発掘調査（昭和 31.3）



平安時代からこの交野の神南備は駿者の行う所となり、岩倉開元寺が建立されてこの峻険に伽藍など一時期があった。

二度にわたる祝融の災（火災）にあい、伽藍をすべて失ったが、寛文の頃天台宗京猪熊荒神別当實傳という僧がここに観音の梵字を刻し、その近傍にある巨石にも三宝荒神の種子「ウン」と金剛界大日の種子「バン」を刻し、

中心の巨岩に一穴を刻して法華経六十六部を納め、ふもとの寺院に仏像を安置して整備するなど中興につとめた。



観音岩・聖観音「サ」



大日如来「バン」



三宝荒神「ウン」

河州交野山開元寺中興開基
奉命建立所者
三寶荒神宮同祥殿向鳥居同額
同大石奉彫荒神之梵字右札同石燈籠
同観音石ニ正観音大梵字同奉納法華経六十六部
同大石ニ阿字之梵字
同龍之鎮守八大龍王
同龍之脇ニ奉彫不動梵字
同龍之不動明王御長座光共ニ八尺之本尊
同不動堂 堂基居同山内安養寺毘沙門堂
同毘沙門大王御長五尺三寸之本尊
同地藏菩薩諸佛之印判ヲ以テ奉自張
御長三尺五寸也
同焰魔王同山内清正寺之如意輪観音
右奉造立者也 為ニ天泰平四海無事十方檀那ニ世安樂親眷屬法界衆靈
自他平等普身利益也
京都猪熊荒神別當
寛文十年三月廿八日大阿闍梨法印實傳
庚戌

観音岩の口から出土の銅板

今日まがりなりにも開元寺の余命が宜春院にうけつがれているのは實傳の努力のたまものといえようか。

法華經六十六部の中にある石灯籠と滝不動梵字写真を貼り付けた。



石灯籠の文字



滝不動の梵字

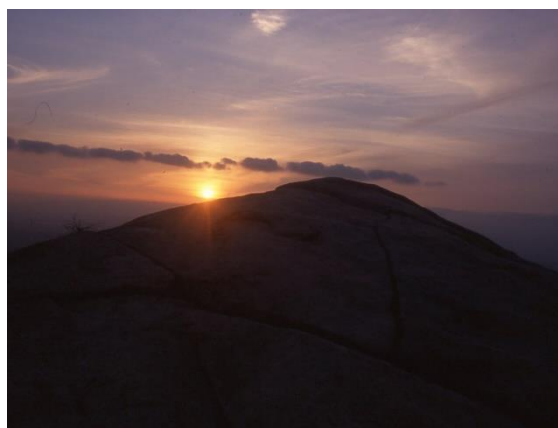
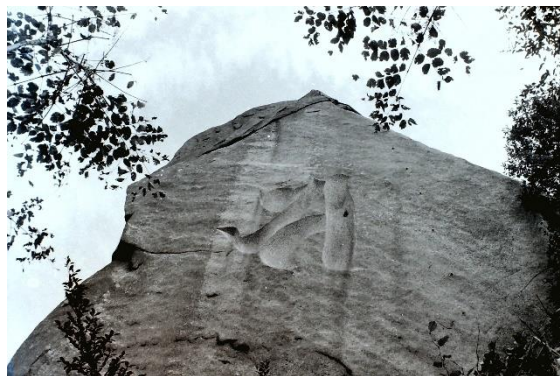
第十四は高峯。
第十五は波多寺。
第十六は田寺。
第十七は八幡。

こうして一時期歴史の光と陰の部分をもった葛城北方の宿ではあったが、それは本来麓に住まう人々の神や神仙との交流の場であった。

霊山あり、霊木あり、巨石あり、かつは西方浄土をまで含んだ神仏との交渉の世界であった。

ここまで「葛城北峯の宿考」の原文とおり
葛城北峯の宿考 木下蜜運 著
写真挿入（古文化資料）

交野山アルバム



次号 7/5